

## 童貞レポート

こんにちは、ともひろです。

このレポートでは、

友達いない便所飯の底辺童貞男だった僕が、  
彼女を5人キープしてホテルに行きまくり、  
セックスしまくるという夢を達成するに至った  
話をしていこうと思います。

友達が10年いなかったとか、便所飯をして  
いたとかいろんなところで書いているけど、そ  
れは事実です。

そんな僕でも 5 人の 20 代ピチピチ彼女を同時にキープしたり、  
僕の好きなコスプレ姿にさせて、  
綺麗な太ももに興奮したりと、  
イヤらしいことを好き放題できるようになりました。

でも昔は、こんな人生になるなんて、  
全く想像もしていませんでした。

だって僕は、友達がいなくて、  
高校の文化祭のとき、  
トイレの個室を徘徊していたキチガイ人間だったんですから。。。

このレポートでは、  
僕の孤独な人生と、孤独からの脱出劇につ  
いて、  
赤裸々に語りました。

正直、書きたくないことだらけです。

でも、あなたには僕のことを少しでも知っても  
らったほうが良いと思いますし、  
自分と向き合うためにも書きました。

興味があったら、読んでみてください。

ではスタートです。

幼稚園の頃。

僕はどうして幼稚園に行かなければならないのか、分からなかった。

どうしてみんなと仲良くしなければならぬ？

幼稚園に通っていた僕は、人見知りです直じやなくて、

無口だった。

クラスでは、全然しゃべらない子がいると、噂になった。

それはすぐに両親に知れ渡った。

そんな僕を見て、父親は、  
自宅の柱をものすごい力で叩き、僕を叱った。

僕はおびえながら、毎日幼稚園に行った。

どうしてこんなにおびえて暮らさなければなら  
ない？

僕はそんなに悪い子なのか。

でも、挨拶をされても無視する、

可愛くない子どもだったから仕方がない。

将来が非常に心配な子供だ。

なにしろ幼稚園の頃の話だから、  
何を思っていたかあまり覚えていない。

しかし、他人と関わることに恐怖していたの  
だと思う。

小学校に上がった。

僕は変わらず大人しくて、

無口で何もしゃべらない。

家ではしゃべるのだが、外の世界に放たれた途端、

体が硬直し、無表情になり、

人とコミュニケーションが取れなくなってしまう子供だったのだ。

何て思われるかが怖くて、

周りの人間に素を出すことができなかった。

父は

「なんでそんな感じ悪い態度をとるんだ。恥ずかしい」

と言った。

耐えるしかなかった。

人に挨拶ができない。

自分から挨拶をすることはないし、

挨拶をしてくる大人がいたら、

「本当に僕に対して声をかけているのか」

が分からないから挨拶しない。

そういう理屈だった。

声をかけたのが自分じゃなかったら恥ずかし

いから、

挨拶したくない。

父親にはまた怒られた。

「ちゃんと挨拶をしろ。」

僕は父親に怒られると、涙があふれ、  
言葉を発することができない。

父「普通の話として言ってるんだ。泣くんじゃない」

と、明らかに普通じゃない血相で怒鳴られ、  
僕は泣くしかなかった。

普通の話として言うなら、普通の顔をして、  
普通のトーンで言ってくれ。

そんな本音を言えるほど、  
僕にはまだ人間ができていなかった。

でも、無口で感じ悪い僕が悪いのだ。

僕は弟と比較されていた。

弟は僕と違って、誰とでも仲良くなれる、  
近所でも人気者だった。

「弟を見習え」

「それに比べてお前は普通じゃないんだよ。」

普通ってなんだ？

弟みたいに明るくふるまうことか？

僕は好きでこんな性格に生まれたわけじゃないんだよ。

なのに、無理やり別の人間になれというのか。

僕は駄目な人間で、弟は素晴らしい人間なのか？

母「そんなんじゃ、大人になってから困るから、

言ってるんだよ」

今の僕は、コミュニケーションの重要性は理解しているし、

両親の言っていることもわかる。

とても心配だっただろう。

何もしゃべらない人間、

人とコミュニケーションが取れない人間なんて、

社会に出てから苦労するのは当たり前だ。

子供ながらに僕だって、友達と仲良く遊んだ

ほうが、

人生楽しいことくらい、分かっていた。

でも、当時の僕は、分かっていたてもできなかった。

僕にとって人と関わることは、

バンジージャンプを飛ぶようなものだったから。

怖かった。とても。

でも、頭ごなしに怒鳴られるから、

僕は自分の感情をしまい込んだまま、

父親の怒りが静まるまで、泣き続けた。

こんなことは日常茶飯事だった。

また、ある日の真夜中。

両親がひそひそ話している。

また僕のことをなんか言っているのか。

恐怖におびえる日々は続いた。

僕は、次第に自信を無くしていった。

両親からの叱責もそうだが、  
永久歯に生え変わったとたんに、出っ歯にな  
ってしまったのだ。

発音がしづらいし、口が閉じれず、  
ガチャピンみたいになった。

ますます喋らなくなった。

そんな自分が嫌になっていった。

でも、そんな悩みは当時、言語化できていな  
かった。

俺はブサイクだ。と、心のどこかで思うようになった。

顔がカッコいい友達に嫉妬した。

ちょうどそんなころ、親が

「何かスポーツをやれ」

と言い、剣道をはじめた。

剣道やったら体が鍛えられて、足が速くなって、顔がカッコいい友達よりも、カッコいい人間になれるかも。

そう思ったから、

「やりたい」とつい口走ってしまった。

自分の劣等感を何とかして払拭したかったから。

顔がカッコいい奴が羨ましくてしかたなかったのだ。

しかし、剣道を始めてしまったことで、  
新たな地獄は始まった。

僕は運動音痴なので、なかなか上手くならな

いのだ。

周りの子は次々と飛び級している中で、  
僕はどんどん取り残されて行った。

「どうしてうまくならないんだ！」

「周りの子はどんどんうまくなってるわよ」

そんなこと言われても、嫌なことをやって、  
上達しろなんて狂ってるよ。

実は、僕は剣道が嫌で仕方なかった。

始めた途端にもう嫌になっていたのだ。

だって運動できないんだもんよ。

けど、親に嫌だと言えなかったから、僕のせいでもある。

今思えば、  
得意なことが一つでもあればいいじゃないか、  
と思う。

テレビゲームの腕は良かったし、  
手先も器用だった。

剣道ができないからって、  
何故否定してくる？

好きで運動音痴になったわけじゃないんだよ。

僕はそう思いながらも、言葉にしようとする  
涙が溢れ、

言葉は飲み込んでしまう。

この思いが両親に届くことはなかった。

僕の思いを素直に両親にぶつけていれば、  
何かが変わったかもしれないのに……。

夏休みの宿題の話をしよう。

僕は 8 月の終わりになって焦り始めるタイプ

だった。

母は怒った。

早く終わらせろと。

でも、勉強なんかつまらない。めんどくさい。

なんでやらなきゃいけないんだ。

大人はいいよな。宿題なんかなくて。

今思えば、勉強しろというなら、

何故人生に勉強が必要なのか教えるべきだし、

もっと言えば、強制させるのではなく自ら勉

強して背中を見せるべきだ。

大人になったら勉強しない。

なぜ？

いくつになっても勉強は大事だ。

勉強は、世の中を知ることだからだ。

人生を楽しく生き抜くために大事な事だ。

世の中を知らずして、良い人生になるだろう

か？

お金をかせぐのも、健康でいられるのも、

人と楽しく関わるのも、すべて勉強から始ま

るのだ。

でもそんなことは、当時の僕が考えられるわけもなく、

ただただ、自分を抑え込むしかなかった。

僕は次第に、人生というものに対してイライラし始めた。

弱いものいじめをする妄想をしていた。

現実では臆病だから、

理不尽にいじめてくる奴に対して戦うことができなかったから。

悔しかった。

俺の権力を示したかった。

親にも逆らえない。学校でも誰にも逆らえない。

素の自分というものを押し殺し続けてきたからだ。

その後も僕の人格は変わらず、中学に入学した。

するとそこは、顔で地位が決まるコミュニティ

だった。

そんなの正直ガキでしかない。クソすぎる。

俺はクラスの中で2番目にブサイクな認定をされた。

まあ、出っ歯だったし表情は自信なかったし。

早速僕はいじめにあった。

クラスイチのジャイアンみたいなやつに、  
腹パンチを食らうのが習慣になった。

すれ違ったら腹パンチされた。カンチョーもさ

れた。

だから僕は、

危険人物に出会ったら、

腹と尻に力を入れてガードする術を身に着けた。

そんな僕にも、中学で好きな子ができた。

なんと、小さい頃会ったことがある子だった。

運命的な再開だ。

小顔でめっちゃ小っちゃい女の子。

クラスは違ったけれど、一瞬で好きになった。

でも、僕は素直じゃない。

すれ違っても無視。興味ない振りをした。

そう、僕の性格はすでにひねくれていて、  
素直になれないのだ。

こんな出っ歯に誰も用はない。

友達なんかいない。

女子になんか興味ないもん。

あまりに大うそつき野郎だ。

ある日の夜。

僕は夢の中で、その子と 2 人で遊ぶ夢を見た。

体育館を走り回ったり、  
どこかの花畑のような、不思議な国で、  
手をつないで走り回ったりした。

楽しかった。ずっと夢の中にいたかった。

女の子と 2 人で遊んだことなんて、人生一度  
としてない。

夢なら覚めないで。

しかし、現実はそのようなことお構いなし。

僕は夢から覚めた。絶望した。

はは、所詮は夢か。

当たり前だろ。

俺みたいなやつが、女の子と遊べるわけないだろ。

夢なんだよ夢。

僕は布団の中で、現実を叩きつけられた。

すると、「ご飯だよー」と、母親の  
呼ぶ声が聞こえた。

その声を聞いた途端、僕は泣いた。

こんな夢、見なければよかったと思った。

お母さんは、俺のこんな気持ち、知るはずもないんだろ。

好きになってしまったあの子。

でも、現実には、目を見ることも、

会話することもできない。

俺の人生ってなんだ？

青春ってなんだ？

わからない。

答えなんか出なかった。

朝からこんなに泣いたのは初めてだ。

朝ごはん食べに降りていきたいけど、

こんなに目が真っ赤じゃ行けないよ。

ある始業式の前日。

あの子と同じクラスになることを死ぬほど祈った。

息が詰まるほど祈り続けた。

しかし結果はかなわなかった。

絶望した。

気づいたら、

もはや僕には味方がいなくなっていた。

体育の授業前の昼休み。

女子は着替えるために全員教室を出ていった。

教室にいるのは男子だけになった。

男子は着替えて、とっくと校庭に飛び出し、楽しそうにサッカーを始めた。

僕は友達がいなかったので、

誰もいない教室でたった一人、立ち往生していた。

人生はすでに終わったと思った。

こんなにも孤独なことがあるのか。

四面楚歌とはこのことか。

それでも僕は耐えた。

学校には毎日行き続けたのだ。

そう、僕は、逃げることができない人間なんだ。

素直じゃない人間だということだ。

剣道の話もそうだが、  
嫌なものを嫌と言えない。

だから、  
中学が死ぬほど嫌でも  
「行かなければならない」という思考停止人  
間となり、  
誰も味方がいない校舎にただただ通う日々  
を続けた。

「生きていてすいません」という気持ちで中学

時代を過ごした。

みんな敵だ。

教室に入ると、みんなが俺を見て、

舌打ちをしてくるように思えた。

これでグレなかったことが奇跡だと思った。

我慢強いことだけが、俺の才能なのか。

音楽の授業で音楽室に行くと、僕の椅子だ

けがなかった。

こんないじめはしょっちゅうだった。

女子からもいじめられた。

そのいじめは瞬く間に騒ぎとなり、  
学級主任や保護者たちを集めて緊急会議が  
開かれた。

僕のいじめについての会議であるw

そんな事実に対しても僕は  
「何を騒いでいるの？なんともないよw」と親  
に言った。

ホントは死ぬほど怖いくせに。大ウソつき野  
郎だ。

ドMなのか？

中学の話は長くなりすぎるのでこの辺にしよう。

好きだった女の子には告白できぬまま、  
卒業式では一人寂しく、一目散に集団から抜け出し、  
家に帰った。

その瞬間、クラスメート全員と縁が切れた。

高校では、リア充な俺を演出して、友達を沢  
山つくるぞ！

そう意気込んで、私立高校に入った。

私立高校に入学。しかし、またもや友達ができない。

夢にまで見たリア充高校生活は、そこにはなかった。

環境が変わったのに、またしても無口なキャラを作ってしまった。

人は変われないんだと思った。

声をかけてくれた友達はいた。

なのに、「俺なんかが話していいのかな」と思

い、

それが相手に伝わり離れていった。

こんなひねくれ者の性格が、全く治っていなかったのだ。

文化祭のときは便所の個室を徘徊した。

遠足でも便所の個室で5時間過ごした。

人生で一番長い5時間だった。

親には友達がいるふりをした。

遠足楽しかったよと。

心配はかけられなかったし、また怒られたくなかった。

もちろん、彼女なんかもできなかった。

高校3年間で、女子と話した記憶はほぼない。

可愛いなと思う子は、クラスにいた。

でも遠目で見ていただけだった。

僕は現実世界ではなく、

ドラマに出てる可愛い女の子に恋愛した。

絶対に叶うことのない恋に、胸が押しつぶさ

れそうになっていた。

大学受験の時期が来た。

とりあえず得意なパソコンを活かそうと、  
プログラミング専攻の大学に受かった。

なんと、また友達はできなかった。

ガイダンスで隣の男が友達になってくれたの  
に、

話がつまんな過ぎてつられた。

友達がいないので、ノートを写させてもらえる  
わけもなく、

授業にはしっかり出た。

でも勉強ができるわけではないので、留年しかけた。

あまりにつまんなくて、自宅と大学の往復だった。

親には、大学生になったんだから、早くバイトしろと言われていた。

だからバイトをはじめた。

でも友達ができるわけではなかった。

そんなとき、僕はネットサーフィンをしていて、

「友達をつくる方法」

とかいう教材に出会った。

胡散臭かったけど、この人は、

俺と同じく学生時代に友達が一人もいなかったらしい。

そんな人が、友達を作った方法・・・か。

有料だけれど、

これでこのクソ人生に終止符を打てるのなら  
と、

なけなしのバイトの給料を突っ込んで、教材  
を買った。

音声の教材だったので、それを聞きまくった。

すると、その音声は、麻薬のように僕の心を  
掴んだ。

これだ。そうか、そうだったんだ。

俺が友達できなかつた理由が、全て明らか  
になったぞ。

コミュニケーションを学ぶのはこれが初めて  
だった。

すると、徐々に僕は素直になっていった。

いきなり音声を聞いたからって行って行動は  
できなかったけれど、  
徐々に、少しだけだけど、自信を取り戻して  
いった。

そんなとき、僕に天使が現れた。

バイトに入ってきたちゃらんぽらんな後輩(男)  
である。

男だけど天使だ。

そいつは、

「今日も大学さぼりましたー！だりーっす！」

とか言ってくる、いわゆるちゃらんぽらんな男。

「ああ、俺とは違う人種か」

と思った。

しかし、どうやら複雑な家庭環境だったようで、  
僕はその家庭の話を、うんうん聞いていた。

すると、だんだんと仲良くなっていったのだ。

話しかけてくれた。

食事に誘ってくれた。

嬉しすぎた。

何で俺なんかと関わってくれるんだ。

救いの女神だった。

俺って必要とされるのかもしれない。

未だ原因は分からないが、その時だけは素直になれた。

「俺なんかが友達になったら迷惑だ」

という感情はなかった。

そいつと関わっているうちに、他のバイト仲間も集まってきて、

どんどん他のバイト仲間としゃべるようになって

ていった。

僕は次々と自分のキャラクターを出せるようになり、

俺がいないときでも俺の話題がでるようになった。

自信がバンバンついていった。

無関心でいられるより、嫌われる方がいいんだと、

「友達を作る方法」の音声で学んでいたからだ。

そんなとき、僕に本当の天使が舞い降りた。  
バイトに可愛い色白女子大生が入ってきた  
のだ。

ネットで教材を買うことに抵抗がなくなってい  
た僕は、

早速、恋愛の教材を買って学んだ。

毎晩、布団の中で、その教材の pdf を読みま  
くり、バイトでその色白女子に試した。

そしたら、

笑ってくれた。

僕の発言で、女の子が笑顔になった。

嬉しすぎた。天使だ。

俺はバイトが楽しくて仕方がなくなった。

しかし、デートや告白もできることなく、  
その子はいなくなると辞めていった。

その後はとりあえずIT系の会社に就職した。

すると、周りはモテない人たちばかりだった。

でも諦めたくなかった。

彼女もいないのに、なぜか仕事をタダ同然で

働く、ドM集団だった。

この人たちは、なんのために働いているの  
だろう？

「あ、これ、私が土日に出勤して、やっときま  
すよー」

いや、業務時間でやれよ。こいつ暇なのか？

そんなことを思ってしまう環境下に置かれ、  
日に日に僕にもイライラが募った。

僕は、定時後、誰も帰らない職場で一人立ち  
上がり、ネットで知り合った女の子とデートに

行った。

土日に出勤しないと責められる環境の中で、  
心を鬼にし、  
平日の夜も土日も、いろんな子とデートしまく  
った。

そんなライフスタイルで生活すること1年半。

僕はまた、ネットで知り合ったある女の子と  
デート中。

初対面の1回目のデートでめちゃくちゃ感触  
がよくて、

次回のデートで決めよう。そう思っていた。

そして今日が、その次回のデート。

僕は、人生で一度も手をつないだことがなかったが、

いろんな女の子と会いまくっているうちに、  
手くらいはつなげるようになっていた。

しかし、それより踏み込んだ行動が、どうしてもできない。

もう、何人失敗して連絡が取れなくなったか、  
分からなかった。

しかし、今日こそは、この子こそは、絶対に  
やってやると、

覚悟を決めて、デートにやってきたのだ。

僕の覚悟は良い方向に働いた。

見事、童貞を卒業したのだ。

何だこの世界は。

俺はついにやったんだ。

僕は恋愛を頑張るコミュニティというものに所  
属していて、そこのみんなに報告した。

みんな、自分のことのように喜んでくれた。

「あのともひろくんが、ついにやったのか！おめでとう！

素晴らしい人生逆転劇をありがとう！！」

そんなことを言われた。

嗚呼、人生って、こんなに楽しいんだ。

おい！俺を散々馬鹿にしたやつ出てこい。

そうだ。中学のとき俺の腹にパンチしたお前とかな。

俺はやったぞ。

大人になれば、人をいじめるようなお前らに、

何の価値もないんだ。

そんなことを思いながら、人生最高の喜びを  
噛み締めた。

ここまで来るのは、本当に大変だった。

何週間も毎日メールのやり取りをしていた子  
と、

いざ初めて会ってみたら、全く言葉を発してく  
れなくて、

今までのメールのやりとりが全て無駄になっ  
たり。

女の子と会うたびに振られ、自暴自棄になっ  
て、

家にあったホワイトボードに

「連続撃沈記録更新！」

とか書いて、何人連続で女子に振られたか、  
正の字で数えていたりしたっけ。

正直狂ってたな。

でも、今では本当にやって良かったと思っ  
ている。

そう。

僕は、人生を生きてる感覚を味わった。

平坦でつまらない人生とは無縁になった。  
エキサイティングでドラマのような人生になった。

その後は、自信がついてしまい、沢山の恋愛  
経験をするようになった。

合コンにもバンバン呼ばれた。

自信はどんどんついていき、会社ではさらに  
居心地が悪くなり、イライラはマックスになって  
いた。

何だお前ら。彼女がいる俺が異常なのか？

お前らは暇だから、休日返上して出勤できるんだよ。

なんだその狂った価値観は。

そう思った。

俺はもう我慢ができなくなり、

恋愛活動で知りあった経営者に、プログラマー

としての技術力をアピールし、

拾ってもらって会社を辞めた。

そしたら、

彼女と居られる時間が増えた。

それまでは会社はストレスだらけだし

残業だらけで時間がなさ過ぎて、  
別れる寸前まで行ったこともあったから。

でも、コミュニケーション能力が、すべてを変えた。

コミュニケーション能力が、人生で最も重要だった。

友達も、恋人も、仕事もお金も、すべてが手に入った。

いや、まだまだいろんな女の子と会ってみたいし、

お金も、自分の事業を始めて年収アップを狙っている真っ最中だ。

これからも、

恋愛やビジネスの世界を通して世の中に価値を提供して行きたいと思っている。

なんだ、全部コミュニケーションじゃないか。

人生は人だ。

すべての根底になるのはコミュニケーション。

僕はそれがなかったからこそわかる。

コミュニケーション能力があると、人生が楽しい。

超楽しい。

人と仲良くなれる。

女の子と仲良くなれる。

女の子が僕の目の前で、赤い顔して服を脱ぎ始めるときなんかは、生きててよかったと思ってしまう。

これからは、恋愛だけじゃなく、ビジネスも成長させて、収入を増やし、より自由な人生を送る決意をした。

これからも、コミュニケーションを学び続ける。

...

かなり長めのレポートになったと思います。

ここまで読んでくれて、本当にありがとうございます。  
います。

夢中で自分の感情をさらけ出してしまいました。  
た。

僕は、いつまでも、素直でありたいと思っています。

僕は、嘘ばかりついていた。

一人は寂しいのに、寂しくないと言ったり  
恋人が欲しいのに、女の子には興味がない  
と言ったり。

大うそつき野郎です。

ちっちゃい頃だってそう。

剣道が嫌なら嫌と、言えばいい。

父親が怖いなら、泣くだけじゃなくて怖いと言えればいい。

本当は友達が作りたいたいけど、どうしても怖いと、自分の気持ちを正直に言えればいい。

親たちだって、人間だ。

完璧じゃない。

子供の気持ちなんて、分からないことのほうが多いのだ。

僕が、初めてちゃらんぽらんな天使(男)の友達ができたのも、

僕が、初めて女性経験をしたのも、

友達をつくる教材や、彼女をつくる教材を、  
無駄なプライドをなくして購入し、素直に実践  
してきたからに他ならない。

自分に素直になった瞬間に、すべてが回り  
始めたのだ。

僕のブログのドメインは、

[truelove-happy.com](http://truelove-happy.com)

自分に嘘をつかず、本当の愛を手に入れて、  
幸せになる。

そんな思いが込められています。

さて、夢中でこのレポートを書いている、  
胸が熱くなってきました。

正直書きたくないこともたくさんあったけれど  
自分の感情に素直になることが、  
どんなに大事なことだったか。

便所徘徊人間が、友達も彼女も作ってブラッ  
ク企業から脱出し、自分で事業を立ち上げた。

正直、親にも友達にも、  
「お前、変わったよな。そんなキャラだったっ

け」

そう言われるようになりました。

今まで会話することをビビっていた人たちにも、

平気で話しかけにいけるようになりました。

身にしみて経験してきたからこそ、強く思うのです。

自分の人生、一度きり。

正直に生きようぜと。

それが結局、周りも幸せにすると思うのです。

また長くなりそうなので、終わりにしますが、  
ここまで読んでいただきありがとうございました。  
た。

ともひろでした。

便所徘徊人間が、童貞を卒業して人生を激  
変させるためにやったことが分かるメルマ  
ガジンは、

↓から登録できます。

[メルマガ登録はこちら](#)

このレポートの感想も、お待ちしておりますね。